

小野塚幾澄博士古稀記念論文集
『空海の思想と文化』
拔刷
平成十六年一月二十一日發行

金剛界マンダラのヒンドゥー神

森

雅
秀

金剛界マンダラのヒンドゥー神

森 雅秀

一、はじめに

『真実撰経』*Tattvasangraha*（『初会金剛頂經』）を典拠とする金剛界マンダラには、ヒンドゥー教の神々で構成されるグループが描かれる。「外金剛部二十天」と総称されるこれらの神々は、『真実撰経』の第二章に相当する降三世品に説かれている。同品の冒頭では、金剛手菩薩による大自在天調伏の物語が語られ、仏教への帰依を拒むヒンドゥー教の神々に対し、大日如来の命をうけた金剛手菩薩が、忿怒形をとつて現れる。その姿に恐れおののくヒンドゥー神たちは、仏教への改宗を受け入れるが、彼らの首領である大自在天のみは頑強に抵抗を続け、結局、后である烏摩妃とともに、金剛手に踏みつけられ絶命する。その後、大日如来の慈悲によつて復活した大自在天は、地の果ての仏国土に仏として生まれ変わる。⁽¹⁾

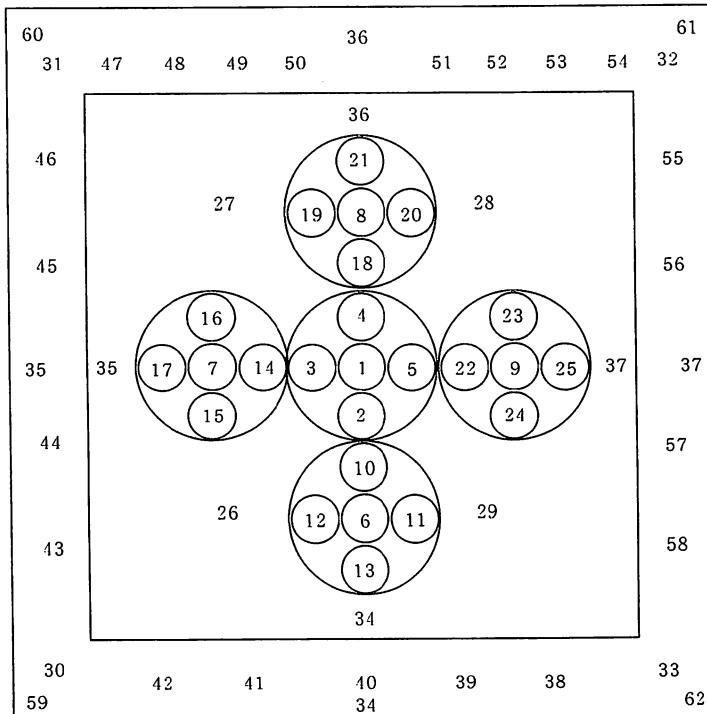
『真実撰経』はそれまでの大乗經典や密教經典とは異なり、マンダラの諸尊の出生、マンダラ制作次第、灌頂儀礼などを、四種の部族（仏部、金剛部、蓮華部、摩尼部）と六種のマンダラ（大、三昧耶、法、羯磨、四印、一印の各マンダラ）という独自のシステムにもとづいて、体系的に、というよりもむしろ、きわめて機械的に説く經典である。

その中において、金剛手菩薩によるこのヒンドゥー神の調伏神話は、他の部分には見られない説話的な内容を持つことで注目される。このことは、降三世品の構成そのものにも関連し、他の章でも説かれる六種のマンダラに、ヒンドゥー神を中心とする四種のマンダラ（大、三昧耶、法、羯磨）を加え、合計一〇種のマンダラを説いている。また、通常の六種のマンダラのうち、はじめの四種のマンダラでは、マンダラの一番外側の区画に、外金剛部二十天の姿も描く（図一）。

マンダラの周辺を仏教ではなくヒンドゥー教の神々でかためるのは、『真実撰經』のみの特徴ではなく、『大日經』にもとづく胎藏マンダラや、『理趣廣經』による金剛薩埵マンダラ、『ナーマサンギーティ』*Nāmasangīti*を典拠とする法界語自在マンダラ、さらには、インド密教の最後を飾る時輪マンダラなどのさまざまなマンダラにも認められる。とくに、このうち『理趣廣經』による金剛薩埵マンダラには、金剛界マンダラの外金剛部二十天とほとんど同じ顔ぶれの神が含まれることで、注目される。⁽³⁾また、無上ヨーガ・タントラの母タントラ系のマンダラには、ダークやダーキニーと呼ばれる神々のグループが登場するが、彼らが仏教の伝統的な尊格ではないこともよく知られている。仏教のマンダラの多くは、ヒンドゥー教やインド土着の神々に周辺を守られることで、はじめて安定的な「仮の世界」を構築することができたのかもしれない。

『真実撰經』の外金剛部二十天は、胎藏マンダラの外金剛院の神々よりも数の上では少ないが、五つのグループに分かれ、すべての神が男神と女神の組み合せからなるという整然とした内容を持つ。五つのグループからなるため、これらの神々は伝統的に五類諸天とも呼ばれる。その内容は三界主、飛行天、虛空天、地居天、水居天で、それぞれ四組ずつの男女の神で構成される。そして、すべてを統轄する神々の王として大自在天とその妃烏摩がいる。この二神はその他の神々とは別格の存在であるが、三界主の筆頭にあげられるため、このグループの一員にも数えられる。外金剛部二十天と呼ばれつつ、実際には二一組四二の神々を含む。

金剛界マンダラのヒンドゥー神（森）



1	毘盧遮那	9	金剛遍入	38-42	三界主	59	ビーマー
2-5	四波羅蜜	10-25	金剛忿怒尊	43-46	飛行天	60	シュリ一
6	金剛手	26-29	内四供	47-50	地居天	61	サラスヴァティ一
7	金剛灌頂	30-33	外四供	51-54	水居天	62	ドゥルガ一
8	金剛軍	34-37	四摄	55-58	虚空天		

図1 降三世大マンダラ尊格配置図（太字はグループ名）

これらの神々のうち、金剛手菩薩による調伏神話の中で、具体的な名称とともにあげられているのは、大自在天と烏摩妃のみで、その他の神々は一括して「諸天」として扱われている。外金剛部二十天の全員の名称は、降三世品の「降三世大マンダラ」の説明の中で、それぞれの灌頂名とともにあげられている。灌頂名とは仏教の神々として生まれ変わったことで与えられた各尊の名称である。この部分には、五つのグループのそれぞれの名称も言及されている。⁽⁴⁾

外金剛部二十天は降三世品の複数のマンダラに描かれるため、具体的な尊容を有していたはずであるが、『真実撰経』本文にはこれに関する情報は含まれない。『真実撰経』にはヨーガ・タントラの学匠のひとりとして名高いアーナンダガルバ *Anandagarbha* が、大部の注釈書『タットヴァーロカカリー』*Tattvalokakari* (TAK) を著しており、この中にそれぞれの神の尊容が説かれている。TAKの伝統はインドのみならず、チベットでも重視されたことが知られている。たとえば、中央チベットのギャンツェにある有名な仏塔ベンコル・チョルテンには、TAKにもとづく金剛界マンダラの大半のマンダラが、壁画として現存している。TAKに説かれた外金剛部二十天の姿も、⁽⁵⁾ここで実際に見ることができる。

この小論では、TAKに含まれる外金剛部二十天の尊容に関する情報を示し、そこから読みとれることを指摘したい。密教の經典やマンダラに登場するヒンドゥー教の神々は、当時の密教がヒンドゥー教をはじめとするインド文化をどのようにとらえていたかを実際に示す具体例である。いわば、密教がその外部に向けて開いていた窓のようなものである。そこから見える光景は、逆に『真実撰経』が成立する背景となるインド文化が、いかなるものであつたかも示す可能性がある。本稿はそのような方向性をもつた試みのひとつである。

一、『タシトガアーローカカリー』に説かれる五類諸天

凡例

①五類諸天（外金剛部一十天）の各尊について、尊名と灌頂名、TAKに命られる尊名の記述を示す。

②尊名の「」、漢訳は施護訳（大正藏第八八一一番、一一七一一頁上）、サンスクリットは『初伝金剛頂經の研究』（堀内1983）、チベット語はそのチベット訳（TTP, No. 112）にしたがう。ただし、ヒンドゥー神としての漢訳名は伝統的な尊名をあげ、施護訳を用いなき場合もある。

③TAKは北原版（TTP, No. 3333, Vol. 71, 254.4.1-255.2.5）とトルケ版（Toh. No. 2510, Vol. Li, 260a.7-261b.5）を参照した。

Khro bo'i rdo rje	四臂。白。宝冠と半月で灌頂。右手はウマー、三鈷杵と与願印、左手は三叉戟、剣。首が青い。
sGyu ma'i rdo rje	ガルダに乗る。黒。四臂。右手は棍棒と金剛杵、左手にはら貝とチャクラ。
rDo rje dril bu	孔雀に乗る。赤。六面。右手にはら貝と金剛杵。左手は鶏と鈴。
Thub pa'i rdo rje	鶩鳥に乗る。金色。四面。右手に金剛杵と数珠、左手に杖と杓。
rDo rje'i mtshon cha	白い牡牛に乗る。薄黄色。右手は出世間の金剛、左手は自らの金剛。
rDo rje 'khyil pa	赤。馬がひく木製の車に乗る。右手は金剛とともに蓮華を持ち左手は日輪とともに蓮華。
rDo rje'i 'od	白。鶩鳥に乗る。右手に金剛杵、左手に月輪とともに蓮華。
rDo rje'i dbyug ba	亀に乗る。青。右手には金剛杵、左手には杖。
rDo rje ser smug	羊に乗る。赤。右手に金剛杵、左手に人の生首を持ち、食べようとする。
rDo rje glang po	白。象に乗る。右手は金剛杵、左手に鍬。
rDo rje'i phreng ba	青白。カッコウに乗る。右手は金剛杵、左手は華鬘。
rDo rje'i dbang	赤黄色。馬がひく木製の車に乗る。右手に金剛杵、左手にはマカラの幢幡。
rNam par rgyal pa'i rdo rje	白。カエルに乗る。右手は金剛杵、左手は剣。
rDo rje tho ba	赤黄色。花のついた乗物に乗る。右手は金剛杵、左手は短剣。
rDo rje'i rlung	青。山羊に乗る。右手は金剛杵、左手は旗。
rDo rje'i me	赤。山羊に乗る。光が激しく輝く三叉戟、右の二臂は金剛杵と大杓、左の二臂は木の杖と小杓を持つ。
rDo rje'i 'jigs pa	青。屍鬼に乗る。右手は金剛杵、左手は棍棒。
rDo rje lcags kyu	青。シェーシャ魔王に乗る。顔は猪。右手に金剛杵、左手に金剛鉤。
rDo rje dus	青。水牛に乗る。右手に金剛杵、左手にヤマの杖。
Sa'i rdo rje bgegs kyi gtso bo	薄黄色。鼠に乗る。右手に金剛杵と斧、左手に三叉戟と象の牙。
Klu rdo rje	薄黄色。金剛マカラに乗る。八つの蛇蓋を伴う。右手に金剛杵、左手にナーガの縄索。

金剛界マンダラのヒンドゥー神（森）

表1 外金剛部五類諸天の尊名と特徴

漢訳名	サンスクリット	チベット語	灌頂名(漢訳)	サンスクリット
三界主 (Sarvatrailocyādhipati, Vajrarājanaka)				
自在天	Maheśvara	dBang phyug chen po	忿怒金剛	Krodhavajra
那羅延天	Nārāyaṇa	mThu bo che	幻化金剛	Māyāvajra
俱摩羅天	Sanatkumāra	Karatika sgra gzhon nu	金剛鈴	Vajraghaṇṭa
梵天	Brahmā	Tshangs pa	寂默金剛	Maunavajra
帝釈天	Indra	dBang po	金剛器杖	Vajrāyudha
飛行天 (Antarikṣacaraṇa, Vajrakrodha)				
日天	Amṛtakunḍalin	bDud rtsi 'khyil pa	金剛軍荼梨	Vajrakunḍali
月天	Indu	Zla ba	忿怒金剛光	Vajraprabha
彗星天	Mahādaṇḍāgri	dByug pa chen po	金剛杖	Vajradanḍa
熒惑天	Piṅgala	Ser smug	金剛水讖羅	Vajrapiṅgara
虛空天 (Ākāśacara, Gaṇapati)				
金剛摧天	Madhumatta	rTsis myos	金剛舜擎	Vajraśaunda
金剛食天	Madhukara	sBrang rtsi byed pa	金剛鬘	Vajramāla
金剛衣天	Jaya	rGyal po	金剛愛持	Vajravaśī
調伏天	Jayāvaha	rGyal bar byed pa	最勝金剛	Vijayavajra
地居天 (Bhauma, Dūta)				
羅刹天	Kośapāla	mDzod skyong	金剛母娑羅	Vajramusala
風天	Vāyu	Rlung	金剛風	Vajrānila
火天	Agni	Me	金剛火	Vajrānala
毘沙門天	Kubera	Ku be ra	金剛大惡	Vajrabhairava
水居天 (Pātālādhipati, Ceṭaka)				
金剛門天	Varāha	Phag	金剛鉤	Vajrāñkuśa
炎摩天	Yama	gShing rje	金剛葛羅	Vajrakāla
毘那夜迦天	Pr̥thivīcūlikā	gTsug phud	金剛毘那耶迦	Vajravināyaka
水天	Varuṇa	Va ru na	龍金剛	Nāgavajra

Khro bo rdo rje ma	
rDo rje'i gser	ヴィシュヌ（那羅延天）と同じ。
rD rje gzhon nu ma	金剛鈴と同じ。
rDo rje zhi ba	梵天と同じ。
rDo rje khu tshur ma	金剛器杖と同じ。
rDo rje mi 'chi ba	忿怒金剛軍荼梨と同じ。
rDo rje mdangs ma	忿怒金剛光と同じ。
rDo rje dbyug mchog ma	忿怒金剛杖と同じ。
rDo rje'i rked chings ma	忿怒金剛氷誠羅と同じ。
rDo rje 'ju ma	金剛舜擎と同じだが、左手に剣。
rDo rje za ba mo	金剛鬘と同じだが、左手に独鈷杵。
rDo rje bgo ba ma	金剛愛持と同じだが、身色が赤い。
rDo rje dga' ba mo	最勝金剛と同じ。
rDo rje pho nya mo	金剛母姿羅と同じだが、左手にカトヴアーンガ。
'Gyo gas ma rdo rje ma	金剛風と同じ。
rDo rje 'bar ma	金剛火と同じ。
rDo rje'i 'khor ma	金剛大惡と同じだが、左手に羈索。
rDo rje'i kha'	青。人の上に乗る。顔は猪で、右手に金剛杵、左手に剣。
rDo rje'i dus	青。屍鬼に乗る。右手に金剛杵、左手にカトヴアーンガ。
rDo rje rul ba	青。右手に金剛杵、左手に短剣。鼠に乗る。
rDo rje'i chu srin ma	白。マカラに乗る。八つの蛇蓋、右手に金剛杵、左手に金剛の印のあるマカラの幢幡。

金剛界マンダラのヒンドゥー神（森）

表2 外金剛部五類諸天後の尊名と特徴

漢訳名	サンスクリット	チベット語	灌頂名（漢訳）	サンスクリット
三界主后 (Traikokyādhipatinām̄ Sarvadevi, Vajrarājanika)				
烏摩后	Umā	U ma	忿怒金剛火	Krodhavarjāgni
銀色天后	Rukmiṇī	Ri gu manye	金剛金色天	Vajrahemā
沙瑟恥天后	Śaṣṭhī	Sha shthya	金剛童女天	Vajrakaumārī
梵天后	Brahmānī	Tshangs ma	金剛寂默	Vajraśānti
帝釈后	Indrāṇī	dBang mo	金剛拳	Vajramuṣṭi
飛行天后 (Anantārīkṣacariṇām̄ sarvamātṛī, Vajrakrodhini)				
甘露母	Amṛtā	Mi 'chi ba	金剛甘露	Vajrāmr̄tā
嚕哩尼母	Rohiṇī	Ro hi ni	金剛光	Vajrakānti
持杖母	Daṇḍadharīṇī	dByug 'dzin ma	金剛火杖	Vajradāṇḍāgrī
惹多訶哩尼母	Jātahārinī	sKye ba 'phrog ma	金剛宝帶	Vajramekhalā
虚空天后 (Khecāriṇām̄ Sarvamātṛī, Ganikā)				
摩哩尼母	Māraṇī	bSod ma	金剛隠没	Vajravilayā
呑伏母	Āśanā	Za ba	金剛呑伏	Vajrāśanā
囉舍那母	Vasanā	bGo ba	金剛自在女	Vajravasanā
那羅爹母	Rati	dGa' ba	金剛愛	Vajravasā
地居天后 (Bhūcāriṇām̄ Sarvamātṛī, Vajradūti)				
寂靜母	Śivā	Zhi ba	金剛女使	Vajradūti
風母	Vāyavī	Rlung	速疾金剛	Vegavajriṇī
火母	Āgneyā	Me	金剛熾盛女	Vajrajvālā
俱尾梨母	Kauberī	Ku be ra ma	金剛利	Vajravikatā
水居天后 (Pātālavāsininām̄ Sarvamātṛī, Vajraceṭī)				
囉囉曳	Vārāhī	Phag mo	金剛口	Vajramukhī
左捫尼	Cāmuṇḍā	Tsa mun drī	金剛迦梨	Vajrakālī
親那那婆	Cinnanāsā	sNa chen po	金剛布單那	Vajrapūtanā
水母	Vāruṇī	Ba ru na mi	金剛摩葛哩	Vajramakarā

三、考 察

(1) 尊容の特徴

『真実撰經』には外金剛部二十天を構成する一一組四二尊の具体的な尊容についての記述はない。これに対し、アーナンダガルバはTAKの中で、個々の特徴を上記のように明確に示していた。この内容が『真実撰經』成立時今までさかのぼることができるかどうかは明らかではない。後述するように、日本の九会曼荼羅とは多くの尊で相違が認められることから、両者は別の系統と見る方が適当である。あくまでもアーナンダガルバの説として扱うべきであろう。

TAKが説く五類諸天の尊容の説明は、身色、持物、座や乗物 (*vishvama*) が中心である。例外的に大自在天が宝冠と半月を頭に飾ることや、金剛門天が猪の頭を持つこと、水天が八匹の蛇蓋をともなう点などが、それ以外の情報として補われている。アーナンダガルバ自身も、尊容の記述の最後にまとめているように、いずれの尊も右手に三鉢の金剛杵を持つ。そのため、各尊固有の持物は、それ以外の手に置かれることになる。一部の尊格は四臂を有するが、その場合も右の第一臂に金剛杵を持つ。これらの右手の金剛杵は、外金剛部という彼らのグループのシンボルであるとともに、金剛界マンダラ全体をつらぬくキーワードである「金剛」を表現したものもある。大自在天以下のこれらのヒンドゥー神は、仏教に改宗することによって灌頂名が与えられるが、そこにはすべて「金剛」の語が含まれている。これは金剛界マンダラを構成する多くの尊と同じである。

右手の金剛杵を除くと、五類諸天の尊容は、一般的のヒンドゥー神の図像的特徴が、そのまま保持されていることが多い。たとえば、大自在天はシヴァの、那羅延天はヴィシュヌのそれぞれ典型的な姿である。全般的に見て、本

來の尊容を維持したまま、右手に金剛杵を持つことで、外金剛部の尊格として生まれ変わっている。ただし、虛空天の四尊などの一部の尊は、ヒンドゥー教の神としての作例はもちろん、文献にも現れることがないため、比較することはむずかしい。

一方、五類諸天^⑤の女尊については、その多くが対応する男尊の尊容をそのまま踏襲している。一部で持物の変更が見られるものの、男尊の尊容を基本として、一部変更を加えることで多くの女尊のイメージが作り出されたのである。ただし、水居天後の四尊について「男尊と同じ」という記述はとらず、それぞれの尊容を説明する。

TAKに示される五類諸天の特徴は、『理趣広経』にもとづく金剛薩埵マンダラのヒンドゥー神のそれとほとんど一致する。^⑥一部の尊格の順序が両者の間で前後するが、尊容はそのまま維持されている。両者の一致は、一方が他方の情報源になつたか、あるいは両者が同じ情報を共有していたことを予想させる。『理趣広経』に対してもアーナンダガルバは大部の注釈書を著し、これはチベットにおいても重視された。アーナンダガルバ自身によつて整備された情報であつたのかもしれない。

ヨーガ・タントラに含まれる大規模なマンダラ、法界語自在マンダラも外金剛部を持ち、ここに百尊近い神々が描かれる。その中にはアスラやナーラ、星宿神なども登場するが、五類諸天も、水居天の金剛門天をのぞく二〇の男尊が含まれている。ただし、虛空天の四尊をはじめ、名称の一致しない尊も多い。尊容については、TAKに示される特徴のうち、一様に右手に持つていた金剛杵が姿を消している他は、多くが共通する。別の見方をすれば、それぞれの神の本来の姿が、法界語自在マンダラの場合、保持されている。ただし、ここでも虛空天の四尊は、持物や乗物に関して、いくつかの相違が認められるばかりでなく、名称も一致しない。^⑦

一方、女尊については、法界語自在マンダラに登場するのはごく限られた尊にすぎない。すなわち、梵天后、帝釋天后、嚙嚙曳、左搗尼の四尊と、銀色天后と沙瑟恥天后をそれぞれヴァイシュナヴィーとカウマーリーと同一と

みなすならば、さらに二尊を加えることができる。⁽⁹⁾ このうち、三界主の四尊は、法界語自在マンダラにおいても、TAKと同様、対応する男尊と同じ特徴と規定されているが、嚙嚙鬼と左押尼は、TAKと法界語自在マンダラとのあいだで尊容が一致しない。

これらのことから見て、法界語自在マンダラの外金剛部の神々は、TAKが説く金剛界マンダラの五類諸天とは、相互にほとんど影響関係を持たずに成立したと考えられる。

(2) 九会曼荼羅との関係

請來本系のいわゆる九会曼荼羅では成身会、微細会、供養会、降三世会の四つの部分に五類諸天が描かれる。また、三昧耶会と降三世三昧耶会には、各尊のシンボルである三昧耶形が尊格のかわりにおかれ。明瞭な尊容を見ることのできる御室版の白描図像と、TAKの記述を比較し、顕著な違いを、以下に箇条書きで示す。⁽¹⁰⁾

①描かれる尊格が、TAKでは五類諸天すべての二一組四二尊であるのに対し、九会曼荼羅では大自在天をのぞく男神の二〇尊のみである。女尊はまったく現れない。

②TAKでは東に三界主、南に飛行天、西に地居天と水居天、北に虛空天を配置するが、九会曼荼羅では東に三界主（大自在天を除く）、南に飛行天、西に地居天、北に水居天をおき、虛空天は各辺の中央に一尊ずつ配置する。

③九会曼荼羅の二十天は、すべて一面二臂で、蓮の葉の上に坐る。TAKでは一部の尊が多面多臂をとり、またすべての尊が特定の乗物（座）に乗っていた。

④TAKの五類諸天に共通してみられた右手の金剛杵は、九会曼荼羅には現れない。九会曼荼羅ではいずれの尊も持物を持ち、それが三昧耶形にもなつていて、これらのアトリビュートは、TAKの各尊の持物と一部は

一致するものの、すべてが含まれているわけではない。

⑤九会曼荼羅では虚空天がいずれも象頭で表されている。これは『真実撰経』の本文で、彼らの総称を「ガナパティ」とすることに一致するが、TAKではとくにそのような規定はない。

⑥九会曼荼羅に描かれた二十天の中には、個性的な図像的特徴を有しているものもある。たとえば、俱摩羅天は頭に三つ（あるいは五つ）の髪を結う、帝釈天は宝冠（帝釈冠）をいただく、火天は聖仙の姿をとる、毘沙門天は甲冑を身につける等である。これらはいずれも各尊固有の特徴として、図像作品や文献にも見られるが、TAKではとくに言及はない。自明のことであったか、あるいは、このような個性を排した姿で描かれていたのかは判断できない。

これらの相違点から見て、アーナンダガルバがTAKの中で示した外金剛部の図像体系が、中国を経て日本に伝わったものと、かなり異なることは明白である。成立年代から考えて、九会曼荼羅に描かれた二十天の方が、TAKにくらべ、より古い形態を示していると考えるのが自然であろう。最後にあげた各尊固有の図像上の特徴が、九会曼荼羅において顕著であることも、それによるのかもしれない。ただし、TAKに見られる那羅延天（ヴィシヌ）の四臂、梵天の四面、俱摩羅天の六面といった特徴は、ヒンドゥー神の図像としては、いわば常識である。各尊の乗物も、多くはよく知られたものである。面数臂数と乗物に関しては、九会の方がより画一化が進んでいると見ることもできる。

配置や尊容で見られた虚空天の特異性は、九会曼荼羅の特徴のひとつである。しかし、虚空天はTAKにおいても、それ以外の四つのグループと別扱いされることがある。尊容の記述などで虚空天は五類諸天の三番目のグループとしてあげられていながらも、降三世マンダラにおける虚空天の位置は、三番目ではなく、全体の最後であった。さらに、降三世品の後半で説かれる四種の三世輪のマンダラでは、日本の九会曼荼羅と同じような位置が彼らに与

えられている。すなわち、大マンダラと法マンダラでは四方の門に、また、三昧耶マンダラと羯磨マンダラでは、内側と外側の二重の楼閣にひとつずつある門に、二尊ずつ分かれて描かれている。いずれもマンダラの四方は三界主、飛行天、地居天、水居天で固め、虚空天（あるいは虚空天后）⁽¹⁾は門衛の役割を担うべく、分散させられている。これは九会曼荼羅における虛空天の扱いに一致している。

(3) 構成する神々の特異性

外金剛部の五類諸天の顔ぶれは、ヒンドゥー教の神話や図像から見ると、かなり特異である。

三界主のうち大自在天、那羅延天、梵天の三神は、はじめの二神がシヴァとヴィシュヌと同一であるとすれば、いわゆるトリムールティの三神として、至高神である三界主にふさわしいが、鳩摩羅天と帝釈天がこれらと同一グループを形成することは一般的ではない。鳩摩羅天すなわちクマーラは『マハーバーラタ』やプラーナ文献において、神々の軍の司令官として、彼らの敵であるアスラを破る強力な神として知られる。一方のインドラ（帝釈天）は、ヴェーダ時代には最も人気を集めた重要な神であるが、ヒンドゥー・パンテオンにおいては、もっぱら護方神の一員として東を守る役割が与えられているにすぎない。

このインドラを筆頭とする護方神たちも、一般には四方と四隅の八尊、もしくは上下を加えた十尊で構成され、まとまつて扱われることが多い。ここでは三界主の帝釈天以外は、地居天と水居天に分散して現れ、しかも、メンバーのすべてがそろっているわけではない。

飛行天の四神は、いずれも天体の神で、一般には九曜の中に含まれる。ここに登場するのは、その第一の日天、第二の月天、第九の計都星、第三の火星に相当する。その他の水星や木星などは登場しない。登場する四尊のサンスクリット名も、九曜に用いられるものとしては一般的ではない。

五類諸天とその後との組合せも、不可解なものが多い。那羅延天（ヴィシヌ）の妻はラクシユミー・ヴァイシュナヴィー、あるいはナーラヤニーなどが多く知られる。それに対し、ここで登場するルクミニーは、ヴィシヌのアヴァターラのひとつであるクリシュナの妻の名である。しかも、クリシュナの妻は一般にラーダーの名で知られ、ルクミニーが妻として登場する神話は『バーガバタ・プラーナ』*Bhāgavatapurāṇa* や『スカンダ・プラーナ』*Skandapurāṇa* などに限られる。クマーラの妻のシャシュティーは「第六のもの」を意味し、クマーラ（カールティー）やあるいはスカンダ）にとって重要な数である六と結びついた女神である。『マハーバーラタ』ではクマーラと結婚するデーヴァセーナーの異名とされるが、本来は特定の月の第六日（*sāṣṭhi*）に行うクリシュナの儀礼と関連した女神で、ベンガル地方では土着的な神として単独でも信仰されていたことが伝えられる。^[12]

水居天の中のチャームンダーは、ヤマの后とされるが、本来この女神は、天然痘などを引き起す恐ろしい女神で、特定の男神の配偶神ではない^[13]。同様のことはピンガラの后ジャータハーリニーについてもあてはまり、「生まれた子を連れ去るもの」を意味するこの女神は、子どもの守護神であるとともに、その命を奪う病魔の女神としても恐れられていた。

五類諸天の神々に対して、仏教の尊名として与えられる灌頂名は、いずれも「金剛」の語を含む人工的な名称で、その多くは、本来のヒンドゥー神の名称の一部や、持物、特徴、あるいは異名や眷属の名が利用されている。その中において、一部の灌頂名に、まったく別のヒンドゥー神の名も現れる。たとえば、チャームンダーの灌頂名ヴァジュラカーリーのカーリーは、よく知られたヒンドゥー女神である。チャームンダーとカーリーはネパールにおいては同一視されることもあるが、インドでは基本的に別の神格である。また、チンナナーサーの灌頂名の一部プータナーも、チャームンダー・ジャータハーリニーと同様に、子どもの命を奪う女神の名称である。

天然痘などの疫病によって子どもの命を奪う女神は、マートリカーと総称される。『マハーバーラタ』やプラーナ

文献に登場する「これらのマートリカーたちは、特定の名称を有しない集合神のように扱われる。おそらく民間信仰のレベルで崇拜されていた「村の女神」(grāmadevatā)が、ヒンドゥー神話に吸収されたものであろう。チャームンダーやカーリーのように、後世、有力な女神となる神も、その出自は「」のような地域的な「恐ろしい女神」のひとりであつたと考えられている。

五類諸天後の二一の女神のうち、三界主^{〔后〕}をのぞく四つのグループは、いずれも「マートリカー」と『真実撰經』の中で総称されていた。これは単なる「母なる神」「配偶神」を意味するのではなく、このような畏怖すべきマートリカーがイメージされていると考えるべきであろう。これに対し、三界主^{〔后〕}は「デーヴィー」と呼ばれ、それ以外のマートリカーたちとは明らかに区別されている。

本来、マートリカーたちは特定の配偶神を持たない集合神であつたが、男神の中のクマーラ（スカンダ）のみとは密接な関係を持つ。クマーラ誕生神話において、マートリカーたちはその庇護者としての位置を占める。童子神であるクマーラ自身、「クマーリカ」（小さなクマーラ）と呼ばれる集合尊を生み、マートリカーたちと同様、子どもの命を奪うことが伝えられている。^{〔1〕}五類諸天の三界主には、大自在天と那羅延天というヒンドゥー教の至高神に統けてこのクマーラがあげられている。五類諸天が背景とするヒンドゥー神のパンテオンにおいて、この神が重要な位置を占めていたことがわかるが、それは五類諸天後の三界主^{〔后〕}以外の女神たちが、マートリカーと呼ばれていることと関連づけることができる。五類諸天の中では、対応する男神と密接な関係を持つていない女神のいくつかは、明らかにこのようなマートリカーを起源としていた。五類諸天の大半が、男尊と同じ尊容をとるのは、もともと具体的なイメージを持たない集合神だったからであると考えることができる。カーリーやチャームンダーはその中においては例外的な存在であつた。

四、おわりに

『真実撰経』とヒンドゥー神との関係を論ずるとときに、しばしば言及されるのが『マールカンデーヤ・プラーナ』*Mārkandeyapurāṇa* の「デーヴィーマーハートミヤ」*Devimāhātmya* (DM) である。梅尾祥雲氏の『曼荼羅之研究』の中で、降三世明王の真言の一部に、DMで殺されるアスラの名称、スンバ、ニスンバ (DMではシュンバ、ニシュンバ) が登場することから、この女神神話を下敷きにして、勝者と敗者を入れ替えたのが、『真実撰経』の降三世品であると推測されている。⁽¹⁵⁾ そして、その背景として「南方印度を経て東方ベンガル地方に栄えて居ったシヴァ教徒を仏教に引入するため」という動機を想定している。

この説に対する疑問は、すでに別のところに示したことがあるが、本稿で取り上げた外金剛部の神々の構成や特徴も、降三世品の成立にDMがほとんど影響を持つていなかつたことを示している。これについては次のような理由をあげることができる。

- ① DMには多くの男神たちが女神に対して武器や持物を与えるシーンがあるが、それらの多くはTAKに説かれる各尊のアトリビュートに一致しない。
- ② DMにもマートリカーラーが説かれるが、これはヴィシヌやインドラなどの配偶神七神を集めた「サプタマートリカーラー」(七母神) で、無名の集合神としてのマートリカーラーではない。
- ③ サプタマートリカーラーの一部は、五類諸天后にも含まれるが、特定のグループを構成することなく、ばらばらに現れ、しかも神名も特徴もDMのそれらに一致しない。⁽¹⁶⁾
- ④ ウマーはDMの主人公である女神の異名として、一般に理解されているが、DMのこの女神は特定の男神を配偶

神としない「処女神」である。ウマーがドゥルガーやカーリーと同体視され、シヴァの妃となるのは、DMよりも後のことである。一方、『真実撰經』でウマーの配偶神とされる大自在天は、DMではサプタマートリカーのひとりであるマーべーシュヴァリーの夫で、しかもDMではとくに重要な役割を果たしているわけではない。

⑤クマーラはDMにおいて重要な位置を占めていない。神話のモティーフからすれば、クマーラによるアスラ征伐の物語が先にあり、その主役を女神にしたのがDMである。

1)のようだ、神々から見る限り、降三世品とDMには密接なつながりは見いだせない。そもそも、梅尾氏が重視するシユンバ、シユンバという名称も、DM以外に『パドマ・プラーナ』*Padmapurāṇa* や『マッヤ・プラーナ』*Matsyapurāṇa* 1)の一人のアスラを殺すエピソードが含まれるし、さらに古くは、四世紀頃の文学作品にも登場するシユンバが描寫されている。クマーラの地位の高さや、マートリカーたちが五類諸天の后たちとして重要な位置を占めていることは、むしろ、クマーラ(スカンダ)信仰を前提として、降三世品が成立したことを予想させる。

降三世品を含む『真実撰經』や『金剛頂經』の起源については、いわゆる「南天鉄塔神話」が古くから知られ、現在でも南インド成立説がしばしば唱えられているが、外金剛部の神々は、1)の説も含め、經典成立そのものについて再考を強く促していくように思われる。⁽²⁾

参考

DM: *Devimāhātmya*

TAK: *Tattvāloka-kākari*

TP: Tibetan Tripitaka, the Peking edition. 『藏書北京版西藏大藏經』 鈴木尊賢著

註

金剛界マンダラのヒンドゥー神（森）

- (1) ニューヨークの翻訳が、田口・酒井（1958）によって発表された。
 - (2) 隆川由品の「マハタトム」名トヘタトムの翻訳（1997）参照。
 - (3) テーナンダカルバ Ānandagarbha の『吉祥最勝本初法華』 Śriparamādyaṭīkā (TTP, No. 3335) による。外金剛部の二十天の翻訳は以下のようにある。
- phyi'i dkyl 'khor gyi lha'i snam bu la shar phyogs su 'Dod pa'i khams kyi dbang phyug dang / Tshangs pa dang/ lHa chen po dang / Khyab 'jug dang/ Karkika dang / brGya byin tshung ma dang bcas pa bri bar bya'o // lho phyogs su ni Zla ba dang / Nyi ma dang / sPen pa dang/ Mig dmar ro // nub phyogs su ITobs kyi lha dang/ dPyid kyi lha dang/ rGyal ba dang / rNam par rgyal ba dang/ Nor shyin dang / Rlung lha dang / Me lha dang / Lus ngan po'o // byang du Phag dang/ gShin rje dang / Tshogs kyi bdag po dang / Chu lha tshung ma dang bcas par bri bar bya'o // (TTP, Vol. 72, 192.4.2-5). 金剛界マハタトムの五類諸天との順序の揺れがある。田中（1987: 189）によると、
- (4) 堀内（1983: 355-367）
 - (5) 立川・山木（1997）参照。
 - (6) チベットのチル寺で編纂された『タヒート部集成』に説かれる尊容を、TAKのそれと比較する。『タヒート部集成』の該当箇所は rGyud sde kun blus, Vol. 5, ff. 527.2-530.2.
 - (7) 法界語自在マンダラの各尊の尊容は、『リハバペハナモーガーガーラー』の第111章「法界語自在マハタトム」の拙訳（1989）参照。五類諸天に命ぜられる尊格を、同訳で用いた番号で示すと以下のようにある。三界主¹³⁸、¹³⁷、¹³⁹、¹³⁶、¹³⁵、¹³³、¹³¹、¹³⁰、¹²⁹、¹⁴⁸、¹³⁰。

(8) 注意を要するのは金剛食天 (Madhukara) で、両方のマンダラに畠まれていながら、尊容は両者で一致せず、金剛界の金剛食天が法界のジャヤカラに、金剛界の金剛衣天 (Jaya) が法界のマヂウカラに、それぞれ対応する。

(9) 描説における尊格の通し番号は、142、143、140、144、145、146。

(10) 参照した版は、大村 (1973)。回図は畠田 (1975) などにも畠まれる。

(11) 三世輪の羯磨マンダラでは、五類諸天のうち男尊は描かれず、女尊のみが描かれる。

(12) Parpola (1994: 229)

(13) チャーマンタービュートは立川 (1990: 268ff.) が詳しく述べる。

(14) 上村 (1981: 191, 197 etc.) 参照。童子神と女神が共通して持つ「」のような機能については、拙著 (2001) 参照。

(15) DM に「」とは横地氏による訳 (小倉・横地 2000) 参照。

(16) 梅尾 (1927: 335-7)

(17) 拙著 (2001: 266-8)

(18) 横地 (2000: 147-9)

(19) サプタチャーマリカーは胎藏マンダラの外金剛院にも現れることが知られるが (畠田 1975: 207-210)、そのメンバーやは一般に知られてくるものとくつかの尊が一致しない。

(20) 横地 (1993: 102-3)

(21) 「南イハム」による概念やのうちにも検討が必要であるが、これについてはヨード (2000) による興味深い論考がすでに発表されている。

文 献

畠田治農 1975 『釈迦羅の研究』 東京美術、一九七五。

- 大村西涯 1973 『[[本画部曼荼羅集 御室版高雄曼荼羅』 国書刊行会（大正2年刊の複製）。
- 小倉 泰・横地優子 2000 『シノヅカ教の聖典』編 東洋文庫、平凡社。
- 上村勝彦 1981 『ヘヘル神話』 東京書籍。
- 白石真道・酒井真典 1958 「初念金剛頂經降三世品の一節」 [『密教文化』 41・42: 99-118.]
- 立川武藏 1990 『女神たちのインデ』 セリカ書房。
- 立川武藏、正木晃彌 1997 『チベット仏教図像研究——ゲンコルチューナ仏塔』（国立民族学博物館研究報告別冊 第一八号）。
- 田中公明 1987 『密教羅刹ヘロジー』 平河出版社。
- 梅尾祥雲 1927 『曼荼羅乃研究』 高野山大学出版部。
- 堀内寛仁 1983 『初念金剛頂經の研究（上）』 高野山大学密教文化研究所。
- 森 雅秀 1989 「〔完成せる〕一ガの環」 (*Nispannayogavāli*) 第21章「法界語自在マンダラ」 訳及びナキスーム『法界マンダラの神々（国立民族学博物館研究報告別冊 第七号）』（長野泰彦・立川武藏編） pp. 235-282.
- 森 雅秀 1997 「〔ハコルチューナ仏塔第5層〕『金剛頂經』所説のマンダラ」『チベット仏教図像研究（国立民族博物館研究報告別冊 第一八号）』（立川武藏・正木晃彌） pp. 269-318.
- 森 雅秀 2001 『ヘヘル密教の仏たち』 春秋社。
- 山下博司 2000 「密教ヒ鹵ヘヘル」『密教の形成と流傳』高野山大学密教文化研究所研究別冊 2: 189-208.
- 横地優子 1993 「*Devimāhātmya* における戰闘女神の成立」『東洋文化』73: 87-120.
- Parpola, A. 1994 *Deciphering the Indus Script*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 【キー】五類諸天、外金剛部、金剛頂經、タツメガトーローカカリ、トーガイーラーベルマニヤ